

# カンキツグリーニング病根絶事業におけるミカンキジラミ

## *Diaphorina citri* 防除と今後の計画

○細川理恵・眞境名元次・金城邦夫

沖縄県病害虫防除技術センター

カンキツグリーニング病(以下、HLB)は、師管寄生難培養性細菌(phloemlimited Bacteria、*Candidatus Liberibacter asiaticus*、以下 CLas)の感染によって発生するカンキツ類の病害で、アジア、アフリカ、ブラジル等で発生している。接木またはミカンキジラミ(以下、キジラミ)、*Diaphorina citri* Kuwayama (Homoptera:Psyllidae)により媒介される(Bové, 2006)。沖縄県(国内)では、1988年に初めて八重山群島西表島で感染樹が発見された(Miyakawa & Tuno, 1989)。さらに1994年沖縄本島南部で新たな感染樹が確認され、その後、南北大東島を除く沖縄県内全域にまん延していることが明らかになった(内藤ら、2001)。

沖縄県では、地域特産果樹であるシークワサーの主要産地である沖縄本島北部の大宜味村において、根絶事業を実施している。大宜味村塩屋湾以北のカンキツ園地のほとんどが山間部にあり、山間部では罹病樹の新たな発見がなく、キジラミの密度も低いため、罹病樹ゼロ・保毒虫ゼロの「侵入警戒エリア」を設定し、警戒を行っている。侵入警戒エリアの周辺で罹病樹およびCLasを保持したキジラミ(以下、保毒虫)が発見される地域を「根絶防除エリア」と設定し、罹病樹の早期発見・早期伐採を行うことで、侵入警戒エリアへの編入を目指している。

事業を開始した2012年度においては、根絶防除エリア内にHLB罹病樹が172本発見された。また、キジラミの好適寄主であるゲッキツが垣根として多く使用され、ゲッキツにおけるキジラミ密度が高かったため、根絶防除エリアを対象に全てのゲッキツ植栽地図を作成し、ほぼ全てのゲッキツに対し年2回、クロチアニジン剤の樹幹散布を行うことでゲッキツにおけるキジラミの密度を低減させた。罹病樹の早期伐採と樹幹散布による防除を継続した結果、2018年度では、新たに発見される罹病樹数は年2本にまで減少した。

今後、より迅速にHLB罹病樹を発見するため、見取り調査と共に保毒虫の探索も開始した。保毒虫が発見された場合、周囲のカンキツ樹を検定することで罹病樹の早期発見につながる。また、カンキツにおけるキジラミ密度が高い地区もあるため、カンキツでの防除が重要な課題である。

The Control of the Asian citrus psyllid, *Diaphorina citri* Kuwayama (Homoptera:Psyllidae) for Huanglongbing(HLB) prevention program in Okinawa prefecture.

Rie Hosokawa, Motoji Majikina, Kunio Kinjo

Okinawa Prefectural Plant Disease and Insect Pest Control Center